

【研究ノート】

ロシア語における有生性に関する一致と 性の対立について

後藤雄介

《要旨》

本稿ではロシア語における有生性に関する一致と名詞の性の対立について検討する。匹田(2015)はロシア語における有生性に関する一致を詳細に検討し、名詞が複数形の場合、屈折タイプと性の対立が失われるという前提を基に、対格から生格への書き換え規則を提案している。一方、後藤(2015b)は、一致の観点から名詞の性は単数形だけではなく複数形においても対立があることを主張している。したがって、性の対立に関して両者は異なる見解を示していることになり、説明出来る事例の範囲も異なる。本稿の目的は、匹田(2015)が提案する格の書き換え規則を修正し、より多くの例を説明出来るよう試みることである。そして、名詞が複数形の場合、屈折タイプの対立が失われることを前提とし、対格から生格へ書き換えが起こるのは(i) 単数形の場合、性[M]; 屈折タイプ[I]; 有生性[AN]、(ii) 複数形の場合、有生性[AN]が揃ったときに行われることを提案する。

《キーワード》ロシア語、有生性、性、一致

0. はじめに

ロシア語の名詞が持つ素性として、性・数・格に加え、いわゆる有生性(animacy)が挙げられる。各名詞は有生性に関して、不活動体(inanimate)と活動体(animate)に分けられる。

(1) 有生性に関わる例

a. 不活動体

стол「机」, книга「本」, письмо「手紙」, компьютер「パソコン」など

b. 活動体

студент「学生」, девочка「女の子」, чудовище「怪物」, врач「医師」など

不活動体・活動体の区別は、主に、名詞が対格支配の動詞の補語として使用されるときに顕在化する。また、この区別は当該の名詞を修飾する一致定語の形態に影響を与える。顕れ方の基本的なパターンは次の3つである: (i)対格形が主格形と同形の場合、(ii)対格形が生格形と同形の場合、(iii)主格形とも生格形とも異なる、独自の形の場合。¹

(2) a. Мы видели *этот* *красивый* *стол.* [対格形=主格形]
we saw this-acc.sg.in.m beautiful-acc.sg.in.m table-acc.sg.in.m

「私たちはこの美しいテーブルを見た」(Pesetsky 2013: 64)

b. Мы видели *этого* *молодого* *отца.* [対格形=生格形]
we saw this-acc.sg.an.m young-acc.sg.an.m father-acc.sg.an.m

「私たちはこの若い父親に会った」(Pesetsky 2013: 68)

c. Мы видели *эту* *молодую* *женщину.* [独自の形]
we saw this-acc.sg.an.f young-acc.sg.an.f woman-acc.sg.an.f

「私たちはこの若い女性に会った」(Pesetsky 2013: 64)

しかしながら、有生性に関する一致は、名詞の性や数、屈折タイプとの関連や、数詞と結合した際に非常に複雑な振る舞いを見せる。

匹田(2015)は、ロシア語における有生性に関する一致を詳細に検討し定式化を行っている。具体的には、名詞の性は複数形では対立が消えること(АН СССР 1980)、そして、屈折タイプも複数形において対立がなくなること(Levine 1978, Barnetová et al. 1979, Pesetsky 2013 等)を前提として、以下の規則を提示している(匹田 2015: 56)。

¹ グロス は Leipzig Glossing Rules

(<http://www.eva.mpg.de/lingua/resources/glossing-rules.php>)を参考に以下のようにした。ただし、適宜本稿執筆者が変更を加えている。nom=nominative, gen=genitive, dat=dative, acc=accusative, ins=instrumental, sg=singular, pl=plural, m=male, f=female, n=neuter, an=animate, in=inanimate, sf=short form, I=1st declension, II=2nd declension. なおグロスは議論に必要な所にのみ示した。

(3) 以下の素性の内、関係するものが全て揃うと[ACC]→[GEN]

性: [M]; 屈折タイプ: [I]; 有生性: [AN]

一方、後藤(2015b)は、一致の観点から、名詞の性の対立は単数形だけではなく、複数形においてもあると論じている。例えば、以下の例において複数形の名詞に性がないとすると、それと一致する形容詞がなぜそれぞれ男性・女性となるかが説明出来なくなる。

(4) a. географический и исторический факультеты
geographical-sg.m and historical-sg.m faculty-pl

「地理学部と歴史学部」(Кохтев & Розенталь 1984: 171)

b. золотая и серебряная медали
gold-sg.f and silver-sg.f medal-pl

「金メダルと銀メダル」(Кохтев & Розенталь 1984: 171)

したがって、名詞の性の対立については、匹田(2015)と後藤(2015b)とは異なる見解をしていることになる。また、各自の論で説明出来る事例のカバー範囲が異なる。

本稿の目的は、匹田(2015)の有生性に関する一致の規則を性の対立の観点から修正し、より多くの事例を説明出来るよう試みることである。

本稿の構成は以下の通りである：1.では匹田(2015)の有生性に関する一致について概観する。次に2.では後藤(2015b)の性の対立に関する議論を確認する。そして、3.にて匹田(2015)が提示する規則の修正を行う。最後に、4.にてまとめと今後の課題を示す。

1. 匹田(2015)の概観

本節では、匹田(2015)の有生性の一致に関する議論について概観する。まず、1.1にて匹田(2015)の理論的前提の内、本稿の議論と関わるものを確認し、1.2にて有生性の一致の例を確認する。そして1.3にて対格から生格への書き換えの場所について概観する。

1.1 匹田(2015)における理論的前提

1.1.1 一致情報のコピー

匹田(2015)は Halle(1994b)などの研究にならい、名詞句内の一致は主要部名詞から他の要素へ素性のコピーが行われ、その素性が形態的に具現化されると考えている。

- (5) 「NP において、主要部名詞の性、有生性、数、そして格は主要部名詞の領域にある指定部と形容詞にコピーされる」(Halle 1994b: 40)

この考え方によれば、次の例において、主要部名詞の性・数・格²・有生性は主要部名詞から一致定語へとコピーされる。

- (6)

↓	↓
↙	↘

 синий карандаш, русская студентка
 blue-nom.sg.in.m pencil-nom.sg.in.m Russian-nom.sg.an.f student-nom.sg.an.f

 「青い鉛筆、ロシア人女子学生」

1.1.2 格とそれ以外の素性

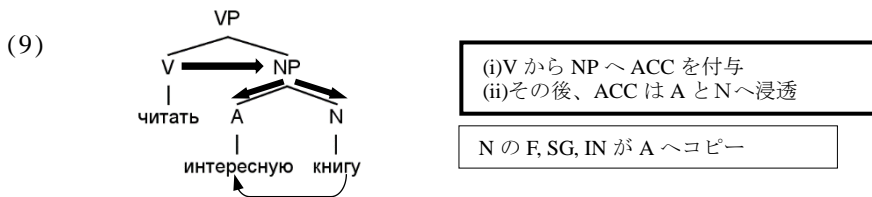
Babby(1980, 1984, 1985, 1986, 1987)及び Freidin & Babby(1984)では、名詞句内のやりとりに関して、格とその他の素性では一致の方法が異なることが主張されている。具体的には、格は格付与子(case assigner)から最大投射 NP へ付与され、NP 内部の要素へ浸透(percolate)する。一方で、それ以外の素性は、主要部名詞から他の要素へコピーされる。

- (7) 「[...]主要部名詞は、実際、修飾語の数と性の一致をコントロールするが、その格表示はコントロールしない」(Babby 1987: 91)

- (8) читать интересную книгу
 read interesting-acc.sg.in.f book-acc.sg.in.f
 「面白い本を読む」

例(8)では、主要部名詞 *книгу* 「本」の [F], [SG], [IN] の素性が一致定語の *интересную* 「面白い」へコピーされる。一方で、格については動詞 *читать* 「読む」から NP 全体へ付与された後、名詞と形容詞へそれぞれ浸透する。

² 匹田(2015)は素性のコピーの方向として、(i)上から下(NP から各要素への格の浸透)、(ii)下から上(N から NP へ性、有生性、屈折タイプのコピー)、(iii)横(N から一致定語へ性、数、有生性のコピー)の3つを想定している。



1.2 有生性に関する一致

0.で述べたように、匹田(2015)はロシア語における有生性に関する一致について検討している。まず、以下の例を参照されたい。

- (10) a. [...] принес *этот журнал* [...]
 brought this-acc.sg.in.m journal-acc.sg.in.m
 「(...)この雑誌を持ってきた(...)」(НКРЯ 2017 10.19)³
- b. [...] знаем *этого человека* [...]
 know this-acc.sg.an.m person-acc.sg.an.m
 「(...)この人を知っている(...)」(НКРЯ 2017 10.19)

上記の例の対格名詞句に関して、a.では不活動体名詞 *журнал*「雑誌」(対格形＝主格形)、b.では活動体名詞 *человека*「人」(対格形＝生格形)が用いられており、一致定語はそれぞれ主格形と同形の *этот*「この」、生格形と同形の *этого* となっている。

上述のように、匹田(2015)は、名詞の性の対立は複数形において消失すること(АН СССР 1980)、そして屈折タイプも複数形においてなくなること(Levine 1978, Barnetová et al. 1979, Pesetsky 2013 等)を前提に、有生性に関する一致で必要な素性は格、有生性、性、屈折タイプの4つがあるとしている。そして、以下の定式の内容を満たす際に対格が生格に書き換えられることを提案している(匹田 2015: 56)。

- (11) (=3) 以下の素性の内、関係するもの⁴が全て揃うと[ACC]→[GEN]
 性: [M]; 屈折タイプ: [I]; 有生性: [AN]

³ 匹田(2015)はロシア語ナショナルコーパス(Национальный корпус русского языка、以下 НКРЯ と略記)から例を引用している。本稿で匹田(2015)がコーパスから引用している例を引用する際は、本稿筆者が再度コーパス上で当該の例を検索し最終確認日を付した。

⁴ 匹田(2015: 56)は、「形容詞など的一致定語においては当然ながら名詞の屈折タイプは関係ないので、屈折タイプは形容詞など的一致素性としては無関係である」と考えている。

上記の規則を基に、例(10)での書き換えを検討しよう。例(10)a.では名詞 *журнал* が [IN] の素性を持っているため、生格に書き換えられない。一致定語へは、[M], [SG], [IN] がコピーされることから、こちらも書き換えは起こらない。一方、例(10)b.の場合、名詞 *человека* は [M], [I], [AN] と書き換えに関する素性が全て揃うため、対格から生格へと書き換えられる。一致定語の *этом* には [M], [SG], [AN] がコピーされるため生格への書き換えが起こる。

次に女性名詞の場合と中性名詞の場合を確認する。

(12) a. *знаю эту женщину / книгу*
 know this-acc.sg.f.an/in woman-acc.sg.f.an.II/ book-acc.sg.f.in.II

「この女性/本を知っている」(НКРЯ 2017 10.19)

b. *Герой убил морское чудовище.*
 hero-nom killed sea-acc.sg.n.an monster-acc.sg.n.I

「英雄は海の怪物を殺した」(Halle 1994a: 202)

例(12)a.の場合、活動体女性名詞 *женщину* 「女性」も不活動体女性名詞 *книгу* どちらも、素性 [F], [II] を持つため書き換えが起こらない。また、例(12)b.では、活動体中性名詞 *чудовище* 「怪物」は素性 [N] を持つためこちらも書き換えが起こらない。どちらの例においても、一致定語はそれぞれ [F], [N] がコピーされているため生格へ書き換わらない。

では、名詞が複数形の場合はどうだろうか。次の例を参照されたい。

(13) a. [...] *знаю этих людей.*
 know this-acc.pl.an person-acc.pl.an

「[...]これらの人を知っている」(НКРЯ 2017 10.19)

b. [...] *нашел этих женщин [...]*
 found this-acc.pl.an woman-acc.pl.an

「[...]これらの女性を見つけた[...]」(НКРЯ 2017 10.19)

c. *Герой убил морских чудовищ.*
 hero-nom killed sea-acc.pl.an monster-acc.pl.an

「英雄は海の怪物を殺した」(Halle 1994a: 202)

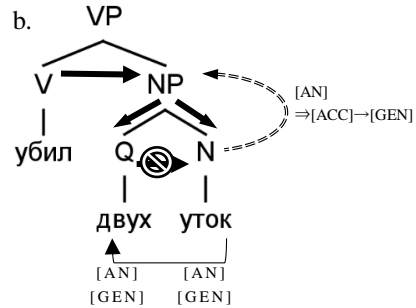
例(13)では、名詞 *людей* 「人々」、*женщин*, *чудовищ* が全て複数形であるため、性と屈折タイプが消失する。そのため、生格への書き換えは [AN] の素性があるだけで行われることになる。各名詞を修飾する一致定語も名詞から [AN] の素性がコピーされるため、全て生格形へと書き換わっている。

1.3 格の書き換えの場所

匹田(2015)は対格から生格への書き換えに関して、節点 NP で起こる場合と、各終端節点で起こる場合の2パターンがあることを指摘している。

(14) 句節点での書き換えが起こる場合⁵

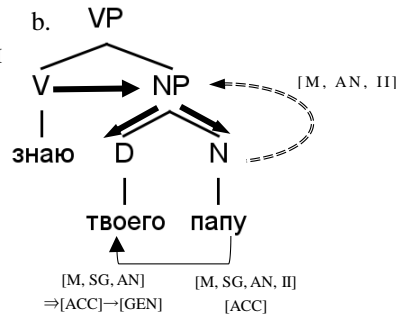
a. (...) убил *двух* *уток*.
 killed two-gen.an duck-gen.pl.an
 「(...)2羽のカモを殺した」(НКРЯ 2017 10.19)



例(14)では、N から NP へ[AN]がコピーされる。そのため、節点 NP で生格へ書き換えが起こる。そして、NP から下へ生格がコピーされる。ここで、N は NP からの生格の浸透と Q からの数量生格が付与される環境にあるが、格の階層により、語彙格の生格が優先される。

(15) 終端節点で書き換えが起こる場合

a. (...) знаю *твоего* *папу*.
 know your-gen.sg.an.m papa-acc.sg.an.m.II
 「(...)君の父を知っている」(НКРЯ 2017 10.19)



⁵ Babby(1980, 1884, 1985, 1986, 1987)及び Freidin & Babby(1984)はいわゆる数詞句(quantifier phrases)が示す格の振る舞いを説明するために、以下の格の優先順位の階層を導入している:

(i) Syntactic Case Hierarchy in Russian (Babby 1987: 116)

語彙格 > 数量生格 > 主格/対格

語彙格とは生格・与格・造格・前置格であり、数量生格とは、語彙格のそれとは異なる、数量詞によって付与される生格である。匹田(2015)はこの格の階層についても前提としている。

例(15)では、N から NP へ [M], [AN], [II] がコピーされる。この場合、[II] があるため生格へは書き換わらず対格が浸透する。N は [II] があるため対格になるが、D は N から [M], [SG], [AN] をコピーしているため、条件が揃い生格へ書き換えられる。

以上、1. では匹田(2015)における有生性に関する一致の説明を概観した。次の 2. では匹田(2015)の前提とは異なり、名詞が複数形であっても性の対立があると論じる、後藤(2015b)を概観する。

2. 後藤(2015b)の概観

本節では後藤(2015b)の性の対立に関する議論を概観する。上述のように後藤(2015b)は一致の観点から、ロシア語の名詞の性は単数形だけではなく、複数形においても対立があると主張している。

先行研究において、名詞の性の対立は、Исаченко(1954), АН СССР(1960, 1970, 1980)を始め、Barnetová et al. (1979), Corbett(1991, 2006), Bailyn & Nevins(2008)など、単数形のときのみ現れ、複数形のときは対立が失われることが言及されている。

例えば、以下の例(16)では名詞 *студенты*「学生」、*ручки*「ペン」、*письма*「手紙」はそれぞれ、男性・女性・中性名詞であるが、複数形名詞を修飾する一致定語は複数形というひとつの形しかもたない。

(16) хорошие { студенты / ручки / письма }
 good-pl student-pl pen-pl letter-pl
 「良い学生 / ペン / 手紙」

また、単数形を持たないいわゆる絶対複数名詞(pluralia tantum)は性を決めることが出来ない。加えて、絶対複数名詞を修飾する一致定語は複数形になる。

(17) летние каникулы, новые часы
 summer-pl vacation-pl new-pl watch-pl
 「夏休み、新しい時計」

一方で、Зализняк(1964)や Pereltsvaig(2010)は名詞が複数形であっても性の対立がある、という立場を取っている。その理由として、次のよ

うな従属節中の例が挙げられている。

- (18) a. Я доволен этими домами, [каждый из которых по-своему хорош].
I satisfied this-pl house-pl each-sg.m from which-pl in_own_way good-sg.m.sf
b. Я доволен этими стенами, [каждая из которых по-своему хороша].
I satisfied this-pl wall-pl each-sg.f from which-pl in_own_way good-sg.f.sf
c. Я доволен этими окнами, [каждое из которых по-своему хорошо].
I satisfied this-pl window-pl each-sg.n from which-pl in_own_way good-sg.n.sf

「私はこれらの家/壁/窓に満足していて、それぞれがそれなりに良い」

(Зализняк 1964: 31)

例(18)の主節では上から順に *эти* *домами/стенами/окнами* 「これらの家/壁/窓」が用いられている。加えて、各名詞は男性・女性・中性名詞であり、全て複数形である。一方で従属節中の *каждый* 「それぞれの」および *хороший* 「良い」の短語尾形を見るとそれぞれ *каждый*, *хорош/каждая*, *хороша/каждое*, *хорошо* となっている。これは *каждый* と *хороший* の短語尾形が主節の名詞と一致が起こっていると考えられる。⁶ そして、名詞の複数形では性の対立が無いと考えると、このような例を説明することが出来ない。

後藤(2015b)はさらに、以下のような(i)定語(単数形) *и* 定語(単数形) + 主要部名詞(複数形)の構造、(ii) *A из B* の構造、(iii)ある種の状況語の3パターンを検討し、名詞が複数形であっても性の対立があると考えている。以下、順番に各パターンを見る。

- (19) (i)定語(単数形) *и* 定語(単数形) + 主要部名詞(複数形)のパターン

(=4) a. географический и исторический факультеты
geographical-sg.m and historical-sg.m faculty-pl

「地理学部と歴史学部」(Кохтев & Розенталь 1984: 171)

b. золотая и серебряная медали
gold-sg.f and silver-sg.f medal-pl

「金メダルと銀メダル」(Кохтев & Розенталь 1984: 171)

例(19)a.では複数形名詞 *факультеты* 「学部」が主要部名詞であるが、その一致定語は男性単数形 *географический* 「地理の」、*исторический* 「歴

⁶ 後藤(2015b: 59)の指摘にあるように、*каждый*, *хороший* の短語尾形のいずれかが主節の名詞と一致し、*хороший* の短語尾形が *каждый* に、または *каждый* が *хороший* の短語尾形に一致する、という可能性もある。この可能性については今後の課題としたい。

史の」である。もし、複数形名詞に性がないのだとすると、一致定語がなぜ男性形となるかの説明がつかない。また、例(19)b.から分かるように、女性名詞を使う場合は一致定語も女性形となる。したがって、名詞が複数形の際、一致定語は **default** で男性形となる、ということは考えられない。

(20) (ii) *A из B* の構造

a. **ОДИН** **ИЗ** **СТУДЕНТОВ**, **ОДНА** **ИЗ** **СТУДЕНТОК**, **ОДНО** **ИЗ** **СЛОВ**
 one-sg.m of student-gen.pl one-sg.f of student-gen.pl one-sg.n of word-gen.pl

「学生の1人、女子学生の1人、語のひとつ」(後藤 2015b: 53)

例(20)では、前置詞 *из*「～の内の」の補語名詞句は全て複数生格である。しかし、数詞 *один*「1」は前置詞の補語の性をそれぞれ反映し、左から順に男性、女性、中性である。

(21) (iii) ある種の状況語⁷

a. **Мальчики** **принесли** **каждый** **по** **яблоку**.
 boy-nom.pl brought each-nom.sg.m DP apple-dat.sg.n

「少年らの各々がリンゴを持ってきた」(Testelet 2001: 268)⁸

b. **Студентки** **принесли** **каждая** **по** **яблоку**.
 student-nom.pl brought each-nom.sg.f DP apple-dat.sg.n

「女子学生の各々がリンゴを持ってきた」(後藤 2015b: 54)

c. **Мы** **рассмотрим** **идеи** **каждую** **по** **отдельности**.
 we consider idea-acc.pl each-acc.sg.f separately

「私達はアイディアそれぞれを別々に検討する」(後藤 2015b: 54)

例(21)は3例とも「名詞(複数形)+*каждый*(単数形)+*по*」の構成となっている。各名詞はどれも複数形であるが、*каждый* は名詞の性を反映して男性・女性・女性となっている。

以上の従属節における一致の振る舞いと3つのパターンの分析から、後藤(2015b)は、ロシア語の名詞は複数形であっても名詞の性の対立がある、と主張している。⁹

⁷ 後藤(2015b)では、他に *один за другим*「次々に」、*один к одному*「いずれ劣らぬ」、*один другого*+比較級「揃いも揃って」が挙げられている。具体的な例については、後藤(2015b: 54, 55)を参照されたい。また、成句 *один за другим* の形態統語的特徴については、後藤(2014, 2015a)を参照されたい。

⁸ Testelet(2001)にならい、分配の意味を表わす場合の前置詞 *по* のグロス DP(distributive preposition)とする。

⁹ ただし、名詞の複数形においても性の対立が失われないとすると、絶対複数

3. 生格への書き換え規則と性の対立

1.では匹田(2015)における有生性に関する一致についての議論を、2.では後藤(2015b)における性の対立に関する議論を概観した。さて、本稿冒頭でも指摘したように、名詞の性の対立については、両者は異なる見解を取っている。すなわち、匹田(2015)は性の対立は複数形において失われるとし、後藤(2015b)は複数形においても対立が存在すると考えている。

ここで匹田(2015)の前提と対格から生格への書き換えに関する規則を再度見てみよう。

(22) a.前提: 性と屈折タイプの対立は複数形にて消失

b.規則: 以下の素性の内、関係するものが全て揃うと[ACC]→[GEN]

性: [M]; 屈折タイプ: [I]; 有生性: [AN]

この前提だと 2.で概観した例における一致が説明出来なくなってしまう。

(23) (=4) географический и исторический факультеты
geographical-sg.m and historical-sg.m faculty-pl

「地理学部と歴史学部」(Кохтев & Розенталь 1984: 171)

そこで、後藤(2015b)が提案するように、名詞が複数形であっても性の対立があると考えてみよう。そうすると匹田(2015)の前提の内、屈折タイプに関する指定のみが残る。しかしながら、性の対立に関する指定をただ削除してしまうと、有生性に関する一致について、以下の例のように、非文を誤って適格なものであると予測してしまう。¹⁰

(24) *нашел эти женщины.
found this-acc.pl.an.f woman-acc.pl.an.f

「これらの女性を見つけた」

例(24)では、名詞 *женщины* に素性[F]があるため生格へ書き換えが起こ

名詞の性はどう考えるべきか、という問題が依然として残る。この点について後藤(2015b: 59)は絶対複数名詞こそ性の対立がない、という可能性もあることを指摘している。絶対複数名詞の性については本稿においても今後の課題としたい。

¹⁰ 性の対立が複数形でもあることを示すため、例(24)のグロスにて、名詞と指示代名詞にそれぞれ素性[F]を付した。

らず、主格形と同形の対格形となってしまう。また、その素性が一致定語にもコピーされるため、こちらも同様に主格形と同形の対格形 *эти* となる。¹¹

そこで、例(23)や(24)の一致のパターンを説明するために、匹田(2015)の前提と規則を以下のように修正することを提案する。

(25) a.前提: 屈折タイプは複数形にて消失

b.規則: 以下の素性の内、関係するものが全て揃ったら[ACC]→[GEN]

(i)単数形の場合: 性: [M]; 屈折タイプ: [I]; 有生性: [AN]

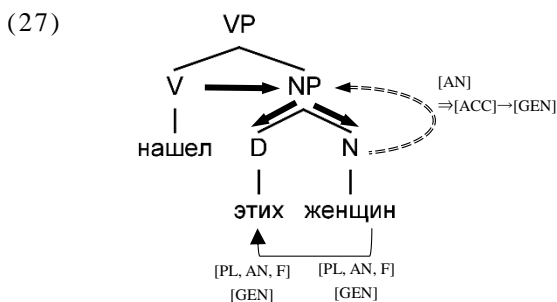
(ii)複数形の場合: 有生性: [AN]

前提は、屈折タイプに関する但し書きのみとする。規則については、数に関する指定を設け単数形と複数形とでは対格から生格への書き換えの条件が異なるように設定することで、上記の問題を回避できる。

まず、一致定語が2つ等位接続されている例に関しては、名詞が複数形であっても性の素性があるため、適切に一致定語へ性素性がコピーされる。

(26) (=4) [**географический и исторический**] **факультеты**
 geographical-sg.m and historical-sg.m faculty-pl.m
 「地理学部と歴史学部」(Кохтев & Розенталь 1984: 171)

次に、対格支配の動詞の補語が活動体複数形の場合である。



¹¹ 後藤(2015b)でも指摘されているように、形容詞は複数形において性の対立がなくなるという可能性もあり得る。その場合、形容詞には素性[AN]のみがコピーされるため *этих* と適切な形が導き出せる。ただし、名詞 *женщина* の方は性が残っているため、いずれにせよ、誤って *женщины* という形を導き出してしまふ。

樹形図(27)では、N が持つ素性は[PL], [AN], [F]であり、それが D へコピーされる。また、N の素性[AN]は節点 NP へコピーされ、ここで対格から生格へ書き換えが起こる。その結果、生格が D と N へ浸透し、*этих женщин* という適切な形が生成される。

4. まとめと今後の課題

以上、本稿ではロシア語における有生性に関する一致を検討した匹田(2015)と名詞の性の対立が複数形でもあると論じた後藤(2015b)の2つを概観し、より多くの事例を説明するためには、匹田(2015)が提案した対格から生格への書き換え規則を修正する必要性を議論した。

まず、1.にて匹田(2015)の理論的前提を確認した後、対格から生格への書き換え規則について概観した。具体的には、匹田(2015)は名詞の性の対立と屈折タイプは複数形において消失するという前提で、対格から生格へ書き換えが行われるのは、性[M]; 屈折タイプ[I]; 有生性[AN]が揃ったときに行われるという主張を確認した。また、格の書き換える場所は2パターンあり得ることを確認した。次に2.では後藤(2015b)の性の対立に関する議論を見た。従属節中の一致や、(i)定語(単数形) *u* 定語(単数形)+主要部名詞(複数形)の構造、(ii)*A u3 B*の構造、(iii)ある種の状況語の3パターンの検討から、複数形名詞においても性の対立があることを確認した。そして、3.では性の対立に関して、両者が提示する事例を説明するためには匹田(2015)の前提と規則を以下のように修正すべきであると論じた。

(28) a.前提: 屈折タイプは複数形にて消失

b.規則: 以下の素性の内、関係するものが全て揃ったら[ACC]→[GEN]

(i)単数形の場合: 性: [M]; 屈折タイプ: [I]; 有生性: [AN]

(ii)複数形の場合: 有生性: [AN]

ただし、本稿では扱うことが出来なかった問題も多くあり、以下でその一部を挙げる。まず、素性のコピーに関してである。匹田(2015)では素性のコピーに関して、最大投射から下の要素へ浸透したり、主要部名詞から他の要素へコピーされたりすることが想定されており、本稿もそ

の考え方にならった。では具体的にどのようなメカニズムでコピーが行われるのかを明確にする必要がある。また、[一致定語+主要部名詞]内でのコピーのやり取りと、例えば、*A из B* の構造における *A* と *B* のコピーのやり取りが同じメカニズムで行われているのかといった点も検討しなければならない。

この点に関連して、匹田(2015)は名詞句内のやり取りを「一致」として扱っているが、後藤(2015b)は名詞句内だけではなく、*A из B* の構造や、従属節が関わる例等も「一致」として扱っている。各事例に対して何が「一致」で何がそうでないのか、あるいは全て「一致」という操作で説明が可能なのか考察が必要である。

また、どの素性がどこまでコピーされるのかということを厳密に規定しなければならない。論理的には、性・数・格・有生性がそれぞれ別個に異なる局所性を持ってコピーされることも当然考えられる。この点について、より広範囲のデータを基に検討する必要があるだろう。

引用文献

АН СССР (1960) Грамматика русского языка, в 2т. Москва: Академия наук СССР.

АН СССР (1970) Грамматика современного русского литературного языка. Москва:

Наука.

АН СССР (1980) Русская Грамматика, в 2 тт. Москва: Наука.

Зализняк, А. А. (1964) “К вопросу о грамматических категориях рода и одушевленности в современном русском языке,” *Вопросы языкознания*, 4, С. 25-40.

Исаченко, А. (1954) Грамматический строй русского языка. Морфология. 1, Братислава: Издательство словацкой академии наук.

Кохтев, Н. Н. & Д. Э. Розенталь (1984) Популярная стилистика русского языка. Москва: Русский язык.

Babby, L.H. (1980) “The Syntax of Surface Case Marking,” *Cornell Working Papers in Linguistics*, 1, pp. 1-32.

_____, (1984) “Case Conflicts and Their Resolution: A Contribution to EST Case Theory,” *Cornell Working Papers in Linguistics*, 6, pp. 1-21.

_____, (1985) “Noun Phrase Internal Case Agreement in Russian,” *Russian Linguistics*, 9, pp. 1-15.

_____, (1986) “The Locus of Case Assignment and the Direction of Percolation: Case Theory

- and Russian,” in R.D. Brecht & J.S. Levine (eds.) *Case in Slavic*, Columbus: Slavica, pp. 170-219.
- _____, (1987) “Case, Prequantifiers, and Discontinuous Agreement in Russian,” *Natural Language and Linguistic Theory*, 5, pp. 91-138.
- Bailyn, J & A. Nevins (2008) “Russian Genitive Plurals are Imposters,” in Bachrach, A & A. Nevins (eds.), *Inflectional Identity*, Oxford: Oxford University Press, pp. 237-270.
- Barnetová, V. et al. (1979) *Русская Грамматика*, in 2 volumes, Praha, Academia.
- Corbett, G. (1991) *Gender*, Cambridge: Cambridge University Press.
- _____, (2006) *Agreement*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Freidin, R. & L.H. Babby (1984) “On the Interaction of Lexical and Syntactic Properties: Case Structure in Russian,” *Cornell Working Papers in Linguistics*, 6, pp. 71-103.
- Halle, M. (1994a) “The Morphology of Numeral Phrases,” in S. Avrutin, S. Franks, & L. Progovac (eds.) *Annual Workshop on Formal Approaches to Slavic Linguistics: The MIT Meeting 1993*, Ann Arbor: Michigan Slavic Publications, pp. 178-215.
- _____, (1994b) “The Russian Declension: An Illustration of the Theory of Distributed Morphology,” In Cole, J. & C. Kisseberth (eds.), *Perspectives in Phonology*, Stanford: CSLI Publications, pp. 29-64.
- Levine, M.I. (1978) *Russian Declension and Conjugation: A Structural Description with Exercises*, Columbus: Slavica.
- Pereltsvaig, A. (2010) “As Easy as Two, Three or Four?,” in Browne, W., A. Cooper, A. Fisher, E. Kesici, N. Predolac & D. Zec (eds.), *Formal Approaches to Slavic Linguistics: The Second Cornell Meeting*, Ann Arbor: Michigan Slavic Publications, pp. 21-37.
- Pesetsky, D. (2013) *Russian Case Morphology and the Syntactic Categories*, Cambridge: MIT Press.
- Testelefs, Y. (2001) “Distributive Quantifier Float in Russian and Some Related Constructions,” in Zybatow, G., U. Junghanns, G. Mehlhorn & L. Szucsich (eds.) *Current Issues in Formal Slavic Linguistics*, Frankfurt am Main: Peter Lang, pp. 269-279.
- 後藤雄介 (2014) 「один за другим への格付与をめぐって」『スラヴ文化研究』 vol. 12、154-176 頁.
- _____, (2015a) 「ロシア語における成句 один за другим の形態統語的特徴について」、未刊行修士論文、東京外国語大学.
- _____, (2015b) 「ロシア語における名詞の性の対立をめぐって — 一致の観点から —」『スラヴィアーナ』第7号(通算29号)、49-60 頁.

匹田剛 (2015) 「ロシア語の有生性の一致について」『ロシア語研究 ロシア語研究会「木二会」年報』No25、43-82頁.

Animacy Agreement and the Gender Distinction in Russian

GOTO Yusuke

In this paper, we consider agreement in animacy and the gender distinction in Russian. Elaborately examining agreement in animacy in Russian, Hikita (2015) proposes a rewriting rule of case on the assumption that the declension type and gender distinctions of plural nouns are neutralized. Conversely, Goto (2015b) argues that not only in singular but also in plural form, the gender distinction of nouns in Russian exists from a point of view of agreement. Therefore, their approach to gender distinction is different, and the range of accountable phenomena varies. The aim of this paper is to modify the rewriting rule of case proposed by Hikita (2015) and try to account for more phenomena. Specifically, we propose that rewriting the accusative case to genitive occurs if the following relevant values of features are present: (i) in the singular, gender: [M]; declension type: [I]; animacy: [AN] and (ii) in the plural, animacy: [AN] on the assumption that the declension type distinction of plural nouns is neutralized.

key words: Russian, animacy, gender, agreement